

Title	ダンテ『神曲』を用いたイタリア語学習： 古典文学と現代イタリア語の語彙について
Sub Title	Learning Italian through Dante's Divine comedy : vocabulary in classical literature and modern Italian
Author	長谷川, 悠里(Hasegawa, Yuri)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.21, (2024.) ,p.55- 74
JaLC DOI	
Abstract	<p>The term “Lessico” in Italian refers to “vocabulary” or “word choice,” signifying the set of words and expressions in a given language or context. In literary works, vocabulary selection is crucial in revealing deeper meanings and the author’s intentions. Analyzing the “Lessico” in classical literature like Dante’s Divine Comedy serves as an effective means to not only learn vocabulary but also understand the origins of the Italian language and its historical context.</p> <p>Dante wrote the Divine Comedy in Tuscan, not Latin. At the time, Italy lacked a standardized language, and various regional languages were spoken. However, Tuscan was considered the closest to Latin and later became the foundation of the common language, especially after being used by writers like Petrarch and Boccaccio. In theological works like the Divine Comedy, understanding vocabulary requires in-depth knowledge and careful consideration.</p> <p>For Japanese speakers learning Italian, the Divine Comedy is an invaluable text. It provides insights into the culture and history behind the language. Despite this, little research exists on using the Divine Comedy for teaching Italian. This paper focuses on vocabulary (“Lessico”) and examines texts used in Italian literary education to propose exercises for intermediate learners.</p>
Notes	調査・実践報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20240000-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ダンテ『神曲』を用いたイタリア語学習

——古典文学と現代イタリア語の語彙について——

長谷川 悠 里

Abstract

The term “Lessico” in Italian refers to “vocabulary” or “word choice,” signifying the set of words and expressions in a given language or context. In literary works, vocabulary selection is crucial in revealing deeper meanings and the author’s intentions. Analyzing the “Lessico” in classical literature like Dante’s *Divine Comedy* serves as an effective means to not only learn vocabulary but also understand the origins of the Italian language and its historical context.

Dante wrote the *Divine Comedy* in Tuscan, not Latin. At the time, Italy lacked a standardized language, and various regional languages were spoken. However, Tuscan was considered the closest to Latin and later became the foundation of the common language, especially after being used by writers like Petrarch and Boccaccio. In theological works like the *Divine Comedy*, understanding vocabulary requires in-depth knowledge and careful consideration.

For Japanese speakers learning Italian, the *Divine Comedy* is an invaluable text. It provides insights into the culture and history behind the language. Despite this, little research exists on using the *Divine Comedy* for teaching Italian. This paper focuses on vocabulary (“Lessico”) and examines texts used in Italian literary education to propose exercises for intermediate learners.

はじめに

「Lessico」という言葉は、イタリア語において「語彙」や「言葉の選び方」を指す。一般に、ある言語や文脈における単語や表現の集合を意味し、特に文学作品においては、語彙の選択が作品の深層的な意味や作者の意図を明らかにする重要な要素となる。ダンテの『神曲』のような古典文学における「Lessico」の分析は、語彙学習にとどまらず、イタリア語の起源やその語彙が用いられた時代の歴史的背景を理解するための有効な手段となる。

ダンテは『神曲』をラテン語ではなく、トスカーナ地方語で執筆した。ダンテの生きた時代、

イタリアにはまだ「標準イタリア語」が存在せず、各地で多様なイタリア語が発展していたが、トスカーナ語はラテン語に最も近いとされ、後にペトルルカやボッカッチョといった著名な文学者たちを輩出したことで、イタリア全土で共通語の母体となった。しかし、『神曲』のように神学的な要素が色濃く反映された文学作品においては、語彙の解釈には深い知識と慎重な考察が必要である。実際、ダンテ自身が『神曲』における語彙の多義性について言及しており、同作品に登場する言葉は字義的な意味と寓意的な意味が重層的に絡み合っている。ダンテは次のように述べている。

『神曲』の意味は、一つではなく、いわば多義的であると定義されましょう。実際、第一の意味は原文の文字の表わす意味であり、ほかは、原文の文字によって意味されるものを通して伝えられるものです。第一のものは字義的と称され、一方、第二のものは寓意的（比喩的）、道徳的、秘儀的（天的）な意味と称されます。

（ダンテ『第13書簡』7）

また、彼は次のようにも述べている。

著作は主として4つの意味で解され得るだけでなく、4つの意味で解き明かさなければならぬ。一つは字義的と呼ばれ、他方は寓意的（比喩的）と呼ばれるもので、物語の装いの下に隠されている真実を示す。第3は道徳的な意味であり、第4は秘儀的（天的）な意味で、超越的（霊的）な解釈が必要となる。

（ダンテ『饗宴』第2巻1）

日本語を母語とする話者に対するイタリア語学習という観点から見ると、異なる文化圏～すなわちキリスト教世界～で発展してきたイタリア語を学ぶ上で、『神曲』は非常に有用なテキストとなり得る。『神曲』の語彙に触れることは、言語の背後にある文化や歴史的背景を理解するための有効な手段であり、イタリア語学習の一環として非常に価値がある。しかし、これまで『神曲』を教材にしたイタリア語学習に関する具体的な課題や事例を考察した先行研究は、管見の限り見当たらない¹⁾。筆者自身、イタリアの中学および文学系高等学校から大学院までイタリア語で学び、母語話者の学生たちとともに『神曲』を学んだ経験があるが、彼らにとっても『神曲』の正しい解釈は非常に難解であったことが思い出される。その難解さの一因として、語彙自体の多義性が挙げられる。ダンテが使用した語彙は、しばしば複数の解釈が可能であり、正確に解釈するためには高い教養が求められる。また、ダンテの時代から現代イタリア語に至るまで、語彙の意味が変容していることもあり、学習者が現代の意味だけに頼ることが

できない点も難易度を高めている。

本稿では「Lessico (語彙)」すなわち「言葉の選び方」の学習に焦点を当て、実際にイタリアの文学系高等学校で使用されている La Nuova Italia 社版の学習用テキスト『天国篇学習のための手引書 *Paradiso Guida allo studio*』(Sapegno 2011) および Le Monnier 社版のテキスト『神曲 出題テーマと研究 *La Divina Commedia Questioni Temi Ricerche*』(Cataldi e Abate 2002) の内容を検討した上で、日本語母語話者のイタリア語中級学習に役立つ練習問題を考察したい。

1. Lessico に関する課題

1.1 『神曲』と現代イタリア語における言葉の意味の違い：天国篇第13歌「contingenza」

『神曲』天国篇には、現代イタリア語における意味とダンテの時代における意味とが根本的に異なる語彙が散見される。特に、ダンテ『神曲』天国篇第13歌64行および第17歌37行における「contingenza (非必然的なもの)」という語は、古典文学において象徴的な意味合いを持つ。これらの詩行において、作者ダンテが意図する「contingenza (非必然的なもの)」の概念と、なぜダンテがこの語彙を選択したのかを探ることは、特にヨーロッパ異文化圏のイタリア語学習者にとって、イタリア語という言語をより深く理解するための有益な手段となるだろう。

活ける光 [神] は、自身の善性によって、自身が放つ光を
9つの実体 [天使たち] の中に、鏡のように集中させるが、
自身は永遠に一つのまま留まる。

ここで私が述べている〈非必然的なもの contingenze〉とは、
生成された [間接創造された] もののことである。天は回転しながら
それらを〈種と共に〉あるいは〈種なし〉に作り出す²⁾。

(天国篇第13歌61-66)

〈非必然的な事柄 contingenze〉は、汝らの物質界の
書から外へ伸び広がることはなく、
すべて、永遠 [神] の御心の中に描かれている。

(天国篇第17歌37-39)

まず、『神曲』における「contingenza (非必然的なもの)」の基本的な意味について考察する。これは、天上世界の「必然的な永遠なるもの」の反意語として機能している。天上界が必然が支配する永遠の世界であるのに対して、4元素からなる地上 (月下) の物質界での出来事は、

すべて非必然的（偶発的）なものである³⁾。さらに、ダンテの時代においては、前述のように神学的な意味合いを伴わない場合、この語彙は単に「機会」といった意味で用いられることもあった。

1.2 日本語母語話者への『神曲』語彙の解説

まず『神曲』における「contingenza（非必然的なもの）」の神学上の意味とその概念を、イタリア語学習者に解説していく。とくに異なる文化圏に育った日本語母語話者にとっては馴染みのない概念のため、どのように解説をすることができるかという一例を挙げてみる。

▶ 「非必然性」とはどういった意味か

ダンテ『神曲』の宇宙は新プラトーン主義の階層宇宙をキリスト教化した構造を踏襲しており、物質界が中心にあり、最下層に地獄が位置している（図3参照）。このようなキリスト教世界においては、すべての存在が「非必然的なもの」と「必然的なもの」に分けられる。神によって直接に創造された存在は永遠不滅かつ、不変の存在とされている。具体的には、①月より上の宇宙（すなわち諸天球）、②それらを司る天使たち（純粹形相）、③第一質料（純粹質料）、④人間の魂である。なお諸天球とは図2と図3にあるように、物質界より上にあって天使が司る天球のことで、月星天から至高天の10の天球のことを指す⁴⁾。

周知の如くダンテは初期キリスト教および古代ギリシャに由来する哲学的理念を継承して宇宙を描いており、天国篇に語られる宇宙像には神の座する「至高天 empireo」と呼ばれる無限の非物質的領域と、その下位の9つの有限な物質天球が存在する。月下の地球では万物が常に変転し、すべての存在が生成消滅の変化を繰り返す。このようなわれわれ人間を含む地上のあらゆる生物、自然物、植物、鉱物などは、すべて直接には神によって創造されなかったものである。4元素を通して間接的に創造されたがゆえに、永遠ではなく、変化し、死していくものとされている。つまり「非必然的」とあるということは、在ることも、在らぬことも可能な存在であるということである。

一方で、地球より上位にある神が直接創造した領域は、「必然の永遠なるもの」とも呼ぶことができる。至高天以下の諸天球は4元素が混在していない第5元素《エーテル》からできている。そしてそれらを司る天使は純粹形相であり、第一質料は純粹質料とされる。これらはすべて、「必然的なもの」である。つまり「非必然的なもの」とは異なり、生成消滅したりせず、在らぬこと自体が不可能な現実態しかない存在である。実際、天国篇第7歌において、神が直接創造したのは天使と天球のみであり、物質界は星々とその知性的な動力によって形作られているという考え方が詳しく述べられている。

～物質宇宙と倫理的宇宙の照応～

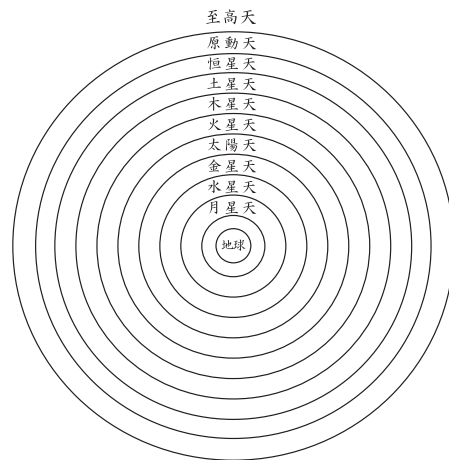
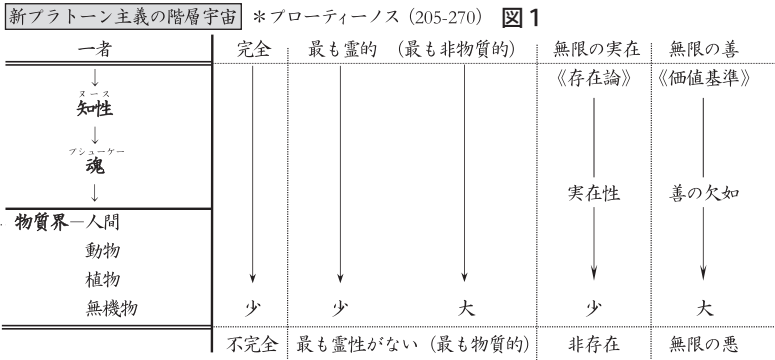


図3

兄弟よ、天使と、あなたが今いる混じりけのない領域だけが、その原初の完全な存在において、今あるように神によって（直接）創造されたと言うことができるのです。

一方、あなたが挙げた（第1質料から造られた）4元素も、またその4元素から作られる合成体も、創造されたもの〔諸天〕の作用によって自らの形相を受け取ります。

（神によって直接）第1質料が創造され、地球圏を回るこの星々の形相力も（神によって直接）創造されました。この第1質料に星々が形相を刻印することで4元素とその合成体が生み出されます。

（天国篇第7歌130-138）

➤ 現代イタリア語のとの相違

『神曲』における神学的な意味を踏まえうえて、次に現代イタリア語における「contingenza」について考察する。現代イタリア語においても、上記のダンテにおける「contingenza（非必然的なもの）」という言葉における、「偶発性」や「予期せぬ事柄」という字義的な意味の共通項は残している。しかしながら、両者の根源的な違いは、もともとはそれが神学用語であったということだろう。例えばキリスト教神学とアリストテレス哲学を統合した重要な神学者トマス・アクイナスの言葉を借りれば、「非必然的なものとは、在ることも、在らぬことも可能なものことである。contingens est quod potest esse et non esse.」（『神学大全』I, q. 83, a. 3, resp.）と述べている。

すなわち「存在しないことも可能」であるということは、「非存在（もっとも不完全）」であるかもしれない、存在するかしないかが決まっておらず、存在するために、他の何かに依存しているものである。それ自体の本性だけでは存在を持たず、他の原因によって存在する。その対極に位置するものとしての神は絶対必然的な存在であり、自己原因（原因を自身以外に持たない存在）である。キリスト教教義においてはこの概念を用いて、必然的な存在（＝神）の必要性を論じたことから、「contingenza」が極めて重要な語彙であったことが理解できるのである。

1.3 現代イタリア語における「contingenza」

一方、今日のイタリア語において「contingenza」は、主として経済学的な文脈で使用されることが多い。そこで、Le Monnier 版学習テキスト『神曲 出題テーマと研究 *La Divina Commedia Questioni Temi Ricerche*』において「contingenza（非必然的なもの）」の意味の変容について言及した練習問題を取り上げる。

但しこの教材テキストには解答集が添付されていないため、解答例や解説、例文などは、日本語母語話者学習者を対象として筆者が考案したものである。

➤ 練習問題① (Cataldi 2012:77)

ダンテ『神曲』天国篇第17歌の第37行にある「contingenza」という名詞は、後期ラテン語の「contingentia」（動詞「contingere」＝「触れる」）に由来し、本来は「偶然の事柄」や「偶発的な存在」を意味します。これは「必然性」と対立する概念です。一般的には「状況」や「機会」という意味でも使われ、現在でもその用法は残っています。しかし、今日では経済学的な意味での使用が多いですが、その現代における意味とは何か答えなさい。また、経済用語として多用されるようになった理由について述べなさい。

➤ 解答例

現代における「contingenza」の主要な意味は、「不測の事態」、「予期せぬ事態」や「経済的な不確実性」を指す。具体的には、経済状況や市場の変動に対して、予測不能で偶発的な出来事を意味する。この用法は、特に「contingenza economica（経済的な不測の事態）」という形で使われ、企業や政府が予期せぬ経済的あるいは市場リスクに対応するための準備を行うなど、また経済施策を施す必要のある状況を指す。

➤ 理由の解答例

現在「contingenza」が経済的な意味で多用されるようになった理由は、近年の経済環境がますます不確実で、予測不可能な出来事（たとえば、金融危機、パンデミック、コロナ禍、地震や気象変動による台風などの自然災害など）が増えていることに起因する。経済において「contingenza」は、計画や予測から外れた状況に対応するための概念として重要な役割を果たす。企業や政府は、こうした「偶発的な状況」に備えてリスク管理や柔軟な対応を重視するようになっており、そのため近年とみにこの言葉が頻繁に使用されるようになっている。

➤ 現代の経済用語としての用法

経済やビジネスの用語としては、例えば、以下のように使われる。

- ・ 偶発的インフレーション（contingenza inflattiva）：予期せぬインフレーションが発生し、それに対する経済政策の調整が必要な状況。
- ・ 偶発基金（fondo di contingenza）：予測できない支出に備えて設けられる財政的な予備費。

例文

◆ インフレに関連する「手当」

A causa dell'aumento dei prezzi, l'azienda ha deciso di introdurre una contingenza per i suoi dipendenti. (価格の上昇により、企業は従業員のためにコスト調整手当を導入することを決定した。)

Il governo ha aumentato la contingenza salariale per contrastare l'inflazione. (政府はインフレに対抗するために給与調整手当を増額した。)

◆ 経済情勢の不確実性や予測し得ない状況に対する準備

Le aziende devono creare piani di contingenza per affrontare le crisi finanziarie improvvise. (企業は突然の財政危機に対処するための緊急対応計画を作成しなければならない。)

L'adozione di una contingenza per le fluttuazioni del mercato è una strategia comune tra le imprese. (市場の変動に備えたコスト調整手当の導入は、企業間で一般的な戦略である。)

◆ 特別な支出や予算の調整

Il bilancio dello stato include una contingenza per coprire le emergenze economiche. (国家の予算には経済的な緊急事態に対応するための予備費が含まれている。)

La contingenza finanziaria permette di rispondere rapidamente a eventi imprevisti come una recessione. (財政的な予備費は、リセッションのような予測不可能な出来事に迅速に対応できるようにする。)

2. 形容詞やラテン語表現に関する課題

2.1 形容詞：天国篇第19歌「pio」

次に、天国篇に登場する形容詞の一例に関する練習問題を取り上げる。『神曲』の天国篇および煉獄篇には、「pio」という重要な形容詞が複数箇所に登場する。この語はダンテにおいて、大きく二つの意味に分けられる。すなわち、「慈悲深い (pietoso)」と「宗教的・敬虔な (religioso, devoto a Dio)」である。頻度的には、『神曲』において「pio」は「慈悲深い」の意味で用いられることが多い。しかし、例えば『煉獄篇』第21歌においては、「pio」は「敬虔な」という意味で用いられている。

それで、私だが、この塗炭の苦しみ [第5環道] に
500年以上も伏し、やっと今、例の欲求から
解き放たれて、至高の敷居への自由な意志を感じている。
君が地震を感じたのも、《敬虔な霊 (I) i pii spiriti》⁵⁾ が主を
— 一刻も早く彼らを主が天上へと送られんことを —
煉獄中で称えるのを聞いたのも、この私のせいだ。

(煉獄篇第21歌67-72)

一方、天国篇第18歌129では、「pio」は「慈悲深い」という意味で用いられており、ダンテはここで神を《慈悲深い父 (pio Padre)》と呼んでいる。

かつては剣を使って (教皇は) 戦争をしたものだったが、
今では、慈しみの父 [神] が誰をも締め出さないパン [聖体] を
あちらこちらで (信者たちから) 取り上げて (戦争を) 行なっている。

(天国篇第18歌127-129)

天国篇における「pio」は、極めて重要な形容詞である。この語はラテン語の「pius」に由来し、その派生語「pietas」は、文脈に応じて多様な意味を持つ。具体的には、人間に関しては、親

に対する「孝心」、友に対する「忠実さ」、家族に対する「愛情深さ」、国家に対する「忠誠心」、神に対する「敬虔さ」など、さまざまな次元で異なる訳語が当てはまる。特に、神に対して用いられる場合には、「慈悲深い（憐れみ深い）」という意味を持ち、中世イタリア語では、人間に対しても「慈悲深い」という意味で使われるようになった。

天国篇第19歌において、複数の注釈者（Sapegno:226、Bongioni:342、Bosco e Reggio:344）は、「pio」を神の属性、すなわち慈悲や憐れみの表現として解釈している。しかし、近年のダンテ研究者であるムレス（Muresu:212-213）によれば、神の二つの属性に関するダンテの立場は、従来の解釈とは異なっていたことが明らかにされている。ダンテは天国篇第7歌において「神の二つの道（自身の二つの道）」を示し、さらに『新生』の中で神を「正義の主（signore de la giustizia）」（『新生』第28章1）および「惜しみなさの主（sire de la cortesia）」（『新生』第42章3）として明確に定義している。

「創造の際に、神が《その惜しみなさから per sua larghezza》
贈った最大の賜物は、神の善性に何よりも見合うものであり、
神が何よりも高く評価されるものである、
自由意志でした。」

（天国篇第5歌19-22）

かくして神が、自身の二つの道を使って、
すなわち、《惜しみなさ》と《正義》の一方、または両方を使って
人間を原初の欠けることのない生に復帰させる必要があったのです。

（天国篇第7歌103-105）

地獄篇第3歌の冒頭で示されているように、神は《正義》である。『神曲』はこの正義の体系であり、地獄・煉獄・天国という宇宙構造そのものが神の正義を反映している。従って、『神曲』は神の正義を語る詩である。次に、神は《惜しみなさ larghezza, liberalità, cortesia, munificenza》であることが示される。従来の解釈はトマスに依拠するあまり、トマスに従って、神は《憐れみ・同情 compassione, pietà》だと人々は解してきた。ダンテはこの第7歌で神の属性は《惜しみなく与え尽くすこと》にあるとして、これに異議を唱えている。ダンテは『饗宴』第2巻第10章6-7でも民衆が「憐れみ pietade」と「惜しみなさ cortesia」を混同しているとして正している。なぜなら神が宇宙を創造したのは《憐れみ》からではなく、《惜しみなく》自らを与えるためだからである。

（藤谷 2025：天国篇第7歌第2回資料）

上記のような「pio」に纏わる解釈の変化をイタリア語学習者には解説したうえで、Le Monnier 社版テキスト『神曲 出題テーマと研究 *La Divina Commedia Questioni Temi Ricerche*』にある課題を取り上げたい。

▶ 練習問題② (Cataldi e Abate : 86)

形容詞「pio」は、天国篇第18歌では「慈悲深い (pietoso)」、煉獄篇第21歌では「宗教的・敬虔な (religioso, devoto)」という二つの意味で用いられていますが、現代イタリア語ではどちらの意味が現在も残っているのでしょうか。

▶ 解答例

現代イタリア語において「pio」という形容詞は、主に「宗教的」「敬虔な」「信心深い」という意味で使われることが一般的である。

- ・ 現代イタリア語における「pio」：現代のイタリア語では、特に宗教的または道徳的に信心深い人物や行動を指すために使われる。例えば、「una persona pia」(敬虔な人)、「una preghiera pia」(敬虔な祈り)などで、この意味は現在でも非常に一般的である。
- ・ 古典イタリア語とダンテにおける「pio」：ダンテが『神曲』で用いた「pio」は、主に「憐み」「慈悲深い」という意味合いで使われている。

2.2 ラテン語の完了受動分詞：天国篇第15歌「decreta」

『神曲』天国篇第15歌では、ダンテとその高貴な先祖であるカッチャグイェーダ (Cacciaguida) の出会いが描かれる。これらの詩行はダンテの個人的な背景と、より広い政治的・歴史的なテーマが交差する重要な場面である。カッチャグイェーダは、12世紀のフィレンツェに生きたダンテの先祖であり、騎士として神聖ローマ皇帝コンラート3世の十字軍に参加し、殉死した人物である。火星天においてこの先祖の霊と対話し、ダンテは自身の出自やフィレンツェの過去について知ることになる。カッチャグイェーダは、12世紀のフィレンツェがまだ平和で、良識ある市民によって成り立っていたことを強調し、現在のフィレンツェが墮落し、権力争いにより腐敗していることを嘆く。さらにダンテの未来について示唆し、彼が試練を受ける運命にあることをほのめかす⁶⁾。これにより、ダンテの詩人としての役割、すなわち神の意志を伝える使命が暗示される。

ここで下記に挙げる第15歌の69行目、カッチャグイェーダの語る言葉のなかに登場するラテン語表現「decreta 出来上がっている」という語について言及したい。まずこの言葉がラテン語の動詞 *decernere* (決定する) に由来することは、この箇所(の)詩行に神託的な性質を与えている。同様の用法は、天国篇第17歌124行 (*sito decreto*) にも見られ、そこでも詩行に荘厳な

響きを与えているが、そちらはより学問的な語調を帯びている⁷⁾。第15歌の「decreta 出来上がっている」は、ラテン語 *dēcernere* 「決定する」の完了受動分詞 *dēcrētus* である。ラテン語の完了受動分詞がそのままイタリア語の形容詞として用いられている特殊なケースである。

だが、聖なる愛の中で私は永久に目覚めて見つめているが、
《その私に甘美な願望を焦がれさせる *m'assetta di dolce disiar*》聖なる愛が、
より十全に実現されるためには おまえは〈声 *voce*〉をあげる必要がある。
臆することなく、自信を以って、
にこやかにおまえの意志と願望を〈響かせるがよい *suoni*〉。
それらに対するわが答えはもう《出来上がっている *decreta*》のだから。」

(天国篇第15歌64-68)

「*decreta*」という語は、古くは形容詞として「定められた、固定された」という意味を持っていた。この用法は現在では消滅しているが、それに対応する名詞「*decreto*」(ラテン語の *decretum* に由来する)は今も生きて形で使用されている。

➤ 練習問題③ (Cataldi e Abate : 67) :

「*decreto*」の意味と用法を説明してください。また、古い形容詞の用法とラテン語の語源との関係について述べなさい。

➤ 解答例

現代イタリア語の「*decreto*」は、日本語で「法令」「政令」「布告」などに相当し、公的な決定や法律の一種を指す。特に、政府、裁判所、または教会などの権威ある機関によって発せられるものを意味し、英語の「*decree*」と近い概念を持つ。この語は、もともとラテン語の名詞「*dēcrētum*」(法令、命令)に由来し、さらに動詞「*dēcernere*」から派生したものである。また、古い形容詞「*decretus*」(定められた)とも関連がある。したがって、「*dēcrētum* = *decreto*」は、現代においても生き続けるラテン語の語彙であり、「確定された決定」や「法的に定められたもの」を意味する言葉として存続している。

2.2.1 イタリア語学習者のための補足的解説

「*decreto*」は、法律や行政の文脈で頻繁に使用される単語であり、ニュースや新聞記事などで目にする機会が多い。そのため、この語を深く理解することで、より高度な時事問題の読解や聞き取り能力の向上につながると考えられる。そこで、以下のような補足的な解説を加えることが適切であろう。

➤ 用法

ニュースや新聞記事で見かける用法として、以下のような法令用語の種類が挙げられる。

Decreto legge：政令・暫定措置令

Decreto legislativo：立法政令（国会の授権に基づき政府が制定する法律）

Decreto ministeriale：省令（各大臣が発する命令）

例文

- ◆ 法律・行政の文脈（最も一般的な用法）：「decreto」は政府や公的機関が発する正式な命令を指す。

Il presidente ha firmato un decreto per ridurre le tasse.（大統領は税金を減らすための政令に署名した。）

Il nuovo decreto stabilisce le regole per l'accesso ai fondi europei.（新しい政令はEU基金へのアクセスのルールを定めている。）

- ◆ 宗教の文脈（カトリック教会の決定など）：ローマ教皇や教会の権威によって発せられる「教令」や「布告」も「decreto」と呼ばれる。

Il Papa ha emesso un decreto sulla canonizzazione del santo.（ローマ教皇は聖人の列聖に関する教令を出した。）

Il decreto vaticano riguarda le nuove norme per la liturgia.（バチカンの布告は典礼に関する新しい規則についてのものだ。）

- ◆ 法廷・司法の文脈（裁判所の判決や命令）：裁判所が特定の命令や決定を下す場合にも「decreto」が使われる。

Il giudice ha emesso un decreto di espulsione per il cittadino straniero.（裁判官は外国人に対する国外退去命令を出した。）

Il decreto del tribunale obbliga l'azienda a pagare i danni.（裁判所の命令により、企業は損害賠償を支払わなければならない。）

- ◆ 一般的な決定・命令の意味（フォーマルな場面で）：法律以外でも、「正式な決定」や「命令」の意味で使われることがある。

Per decreto del direttore, l'ufficio chiuderà un' ora prima oggi.（所長の命令により、今日オフィスは1時間早く閉まる。）

Con decreto del consiglio, il progetto è stato approvato.（評議会の決定により、そのプロジェクトは承認された。）

3. 派生語の学習：天国篇第18歌「mirare」

次に派生語の学習に役立つ課題例として、ダンテ『神曲』天国篇第18歌34行にある動詞「mirare」の意味を、現代イタリア語における用法と比較し、複数の派生語の類似点と相違点を挙げる練習問題を取り上げたい。

それ故、正十字の腕木を《よく見つめておくのだ mira》。
これからわしが名を挙げる者が、雲から生成された
稲光が雲の中を走るように、素早く移動するだろう。

(天国篇第18歌34-36)

➤ 練習問題④ (Cataldi e Abate : 79)

辞書や語源辞典を参考にして、「mirare」から派生した、現在よく使われている語をいくつか挙げて、その語を用いた例文も書きなさい。

➤ 解答例

『神曲』天国篇第18歌の34行における「mirare」は、現代イタリア語で使われる「mirare」とは異なる意味合いを持っている。

◆ ダンテの「mirare」の意味

ダンテの『神曲』で使われる「mirare」は、ラテン語 *mīrārī* の意味を保持しており、単に「見つめる」や「注視する」といった意味だけではなく、対象に対する驚きや強い関心や深い尊敬を込めて見つめるというニュアンスがある。この場合、対象は神や崇高な存在であることが多く、単なる視覚的な認識を超えて精神的、霊的な視線を意味している。

◆ 現代イタリア語における「mirare」

現代のイタリア語における「mirare」も、主に「見る」や「注目する」という意味だが、感情的な価値を伴う「驚く」や「感嘆する」という意味がしばしば伴う。例えば、「mirare qualcosa con stupore」(驚きながら何かを見る)という形で用いられる。

➤ 類似点

両方の用法に共通するのは、「見る」「注目する」という意味がある点である。ダンテにおける「mirare」も、現代イタリア語における「mirare」も、物理的に目で見るという行為を指している。

➤ 相違点

ダンテの「mirare」は、単なる視覚的な行為に留まらず、精神的・霊的な注視を含んでいる。神の存在や崇高なものに対する「深い注目」「敬意を込めた注視」が含まれているのに対し、現代イタリア語の「mirare」は比較的軽い意味合いで使われることが多く、感嘆や驚きが伴うこともある。

➤ 派生語

◆ “ammirare”（讃嘆する、驚嘆する）

現代イタリア語で「mirare」から派生した最も一般的な単語。「ammirare」は「驚嘆する」「賞賛する」という意味で、対象に対して非常に高い評価や感心を示す際に使われる。

例文：Ammiriamo la bellezza del cielo stellato, come faceva Dante nel Paradiso.

（私たちは星空の美しさに感嘆する。ダンテが『天国篇』でそうしたように。）

◆ “miraggio”（蜃気楼）＊1753年フランス語の mirage に由来。

「mirare」から派生した名詞で、「miraggio」は「蜃気楼」を意味し、視覚的に現れる幻想的な景象を指す。元々は「見ること」に関連する意味から、幻想や誤認を意味するようになった。

例文：L'idea di un'Italia unita era solo un miraggio ai tempi di Dante.

（ダンテの時代、統一されたイタリアという考えはただの幻想にすぎなかった。）

◆ “miracolo”（奇跡）“miracoloso”（奇跡的な）

「mirare」から派生した名詞（ラテン語の mirāculum 「驚くべきこと」に由来）と形容詞で、何かが非常に素晴らしく、驚くべきものであることを示す言葉。奇跡や神秘的な出来事に関連している。

例文：La sopravvivenza di Dante all'esilio fu quasi miracolosa.

（ダンテが亡命生活を生き延びたことは、ほとんど奇跡的であった。）

◆ “miratore”（観察者、評価者）：

「mirare」から派生した名詞（ラテン語の mirātor 「讃嘆者、賞賛者」に由来）で、何かを見て評価する人を指す。特に芸術作品や自然の美しさに感動した人などが使われることがある。

例文：Dante, nel suo viaggio ultraterreno, è un attento miratore delle verità divine.

（ダンテは、その来世の旅において、神の真理を注意深く見つめる者である。）

このような練習問題からイタリア語学習者は、「mirare」から派生した現代の語が、視覚的な行為を超えて、感情や評価、幻想に関連する多くの動詞、名詞、形容詞に発展していった事例を学ぶことができるだろう。

4. 字義的な意味と寓意的（比喩的）な意味の学習

天国篇第11歌の第87行の「カペストロ（capestro）」という語は、ラテン語の「capistrum」（＝くつわ、手綱）から派生しており、もともとは「荷車を引く動物の頭部にかける縄」を意味する。ここから、比喩的に「服従のしるし」という意味が派生し、ダンテはフランチェスコ会修道士の「腰ひも」（逡りのしるし）を暗示するために寓意的に用いている。

その後、教父にして師〔聖フランチェスコ〕は自身の貴婦人〔貧困〕とすでに逡りの《腰紐 capestro》を縛られたあの《家族 famiglia》を連れてアッシージから（ローマへ向けて）出立した。

（天国篇第11歌85-87）

4.1 イタリア語学習者のための補足的解説について

日本語母語話者の中には、修道士の服装を目にしたことがなくフランチェスコ会の成り立ちに関する知識を持たない学習者も多いため、以下のような解説を加える必要があると考えられる。

◆ 歴史的背景の解説

1210年頃、聖フランチェスコは11人の弟子を伴いローマを訪れ、教皇インノケンティウス3世に対して自身と仲間の修道生活の承認を求めた。この訪問は、後にフランチェスコ会の設立へとつながる重要な出来事であり、中世カトリック教会における修道運動の発展に大きな影響を与えた。

◆ 修道生活の形成と承認の必要性について

聖フランチェスコは、俗世を離れ清貧に生きることを理想とし、キリストの教えに忠実な生活を送ることを目指した。最初、インノケンティウス3世は厳密にイエスの教え通りの生活をすることは不可能であるとして、フランチェスコの嘆願を受け容れなかった。フランチェスコが歴史的に重要なのは、彼以降、教会関係者の中に、イエスの教えを忠実に従う者が増えていったからである。もともとキリスト教はイエスの教えを伝えるための宗教としてイエス自身が創設したものではなく、彼の死後、イエスをキリストと信じて、信者が天国へ行くための宗教として成立し発展してきた。しかしフランチェスコ以後、共鳴する者たちが次第に増え、やがて共同体が形成された。フランチェスコとその弟子たちは従来の修道会の枠組みに属さず、独自の清貧生活を実践していたが、カトリック教会の公式な承認なしに活動を継続することは困難であったため、教会の承認を得ることによって、彼らの存在が公的に認められ、より広範な布教活動が可能となると考えた。

◆ 承認とその影響

インノケンティウス3世はフランチェスコの願いを受け入れ、彼らの生活規範を口頭で承認した。これにより、フランチェスコとその仲間たちは正式な修道会としての地位を得ることとなった。この時点ではまだ正式な修道会規則は成立していなかったが、彼らの活動が教会によって公的に認められたことは、後のフランチェスコ会の発展において極めて重要な意味を持つ。このローマ訪問は、フランチェスコ会の歴史の中でも特に重要な転換点とされる。清貧を基盤としたフランチェスコの理念は、従来の修道会とは異なる新しい修道生活の形態を示し、後の托鉢修道会の発展にも大きな影響を及ぼした。教皇の承認を得たことにより、フランチェスコとその弟子たちは公式に教会の一員として認められ、以後の活動の基盤を築くこととなったのである。

➤ 『神曲』における「capestro」の注釈例

「彼の修道士たちの最初のグループは、まさに聖人（フランチェスコ）の家族を形成している。これは、彼が現世の家族を捨てた後のことである。彼らは全部で十一人であり、師（フランチェスコ）の模範にならば、腰に縄（capestro）を締めていた。capestroとは本来、馬や牛などの頭を縛るための綱（すなわち、cavazza）である。フランチェスコは、それをベルトや他のものの代わりに用い、謙虚さのしるしとした。」
(Bosco e Reggio : 205-206)

4.2 「Capestro」に関する練習問題

現在でも「capestro」という語はイタリア語で使用されているが、当時の宗教的な意味とは重ならない、まったく異なる比喩的な意味を持つに至っている。以下に、関連する学習問題を教材テキストから取り上げる。

➤ 練習問題⑤ (Cataldi e Abate : 49)

「capestro」は現代においてどのような意味で用いられる言葉か答えなさい。

➤ 解答例

現代において「capestro」は、依然として使用されているものの、その比喩的な意味はダンテの時代とは異なるニュアンスを持っている。ダンテはこの語をフランチェスコ会修道士の「腰ひも」を象徴するものとして用いており、そこには遜りや服従を示す意味合いがある。

しかし、現代では「capestro」は「動物の頭を縛る縄」「ホルターネック」が字義的な意味である。そして比喩的な意味では、聖フランチェスコに因んだ「遜り」ではなく、「厳しい制約」「不公平な契約」「抑圧的な状況」また「誰かに縄をかけ、自分の意志に服従させる」あるいは

「処刑用の縄」特に「絞首刑に用いるロープ」を指す比喩的表現に変容している。すなわちその意味は本来の「遜りのしるし」としての意味を超えて、「刑罰」「死の運命」や「極刑」といったネガティブなイメージに繋がっている。このように、かつては遜りや服従を象徴していた語が、今日では悪人にかかる縄や刑罰、苦難を象徴するものとして認知されるようになったといえる。

例文

◆ 過酷な契約や条件を指す場合

Ho firmato un contratto capestro senza leggerlo bene e ora sono nei guai.

(よく読まずに不公平な契約にサインしてしまい、今困っている。)

Le condizioni del prestito sono un vero capestro per le piccole imprese.

(その融資条件は中小企業にとって本当に過酷だ。)

Quel mutuo è un capestro: gli interessi sono altissimi!

(あの住宅ローンはまるで絞首刑の縄だ。金利がとて高い！)

◆ 抑圧的な状況を指す場合

Questo lavoro è un capestro, non ho mai un momento libero!

(この仕事はまるで首を絞める縄のようだ。自由な時間が全くない！)

Le nuove regole imposte dal governo sono un capestro per i cittadini.

(政府が課した新しい規則は市民にとって大きな束縛だ。)

Vivere sotto il controllo costante dei social media è un capestro psicologico.

(常に SNS の監視下にある生活は、心理的な束縛だ。)

◆ 経済的・社会的な圧迫を表す場合

Le tasse elevate stanno diventando un capestro per molte famiglie.

(高額な税金が多く、多くの家庭の首を締めつけている。)

Il costo degli affitti è un capestro per i giovani che vogliono vivere in città.

(都市で暮らしたい若者にとって、家賃の高さはまるで絞首刑の縄のようだ。)

La burocrazia in Italia è un capestro per chi vuole avviare un'attività.

(イタリアの官僚制度は、事業を始めたい人にとって大きな足枷だ。)

以上のように、時代を経たひとつの転義的変化の事例を学ぶことは、言葉が時代とともに文化的・社会的な背景を反映しつつ、意味を変容させていく一例として、イタリア語学習者にとっても興味深いものとなるだろう。

おわりに

本論では、ダンテの『神曲』における語彙 (Lessico) の重要性と、日本語母語話者のイタリア語学習における有用性について検討してきた。特に、形容詞やラテン語表現の分析、派生語の学習、字義的な意味と寓意的 (比喩的) な意味の違いに焦点を当てることで、『神曲』の語彙が持つ多層的な構造を明らかにした。また、古典文学におけるイタリア語の多様な用法を学習するために、ラテン語の知識や寓意的表現の理解がいかに重要であるかも示した。

文中の練習問題については、実際にイタリアの文学系高等学校で使用されている学習用テキストを引用し、現代イタリア語との語彙の変遷を踏まえた学習方法について考察した。考察の過程で、日本語母語話者が『神曲』をイタリア語中級教材テキストに用いる際には、単に単語の意味を知るだけではなく、その背後にある歴史的・神学的背景を理解することが不可欠であることが明らかとなった。そのため、本稿では独自の観点から、特定の語彙や表現に対する補足解説や例文を加え、学習者にとって理解を深めやすいアプローチを模索した。こうした補足が、イタリア語学習者が単語の表面的な意味にとどまらず、より深い言語文化的な文脈の中でイタリア語を学習し、『神曲』を読む手助けになることを期待する。特に、ラテン語の影響を受けた語彙や、トスカーナ語としての発展の過程で形作られた表現は、現代イタリア語の文法や語彙体系とも密接に結びついている。したがって、『神曲』の言葉を学ぶことは、単なる語彙習得にとどまらず、イタリア語の成り立ちや歴史的変遷を理解する上でも重要な役割を果たす。

またダンテの用いる形容詞は、単なる描写にとどまらず、神学的・哲学的な意味を含むことが多い。特に、天国篇においては、形容詞が比喩的表現と結びつき、霊的な世界の表現を担っている。これにより、学習者が単語の意味を表面的に理解するのではなく、その背後にある概念や象徴性を意識することの重要性が示された。さらに、ラテン語の完了受動分詞に由来する語の使用についても、本研究では詳細に検討した。ダンテの時代には、ラテン語が依然として知識人の間で広く用いられており、その影響が語彙に色濃く表れている。特に、動詞の過去分詞形が形容詞的に用いられるケースや、比喩的な意味を持つ語の使用について、現代イタリア語との比較を通じて学習の手がかりを提供した。このような語の学習を通じて、イタリア語の語彙の成り立ちや、時代ごとの変遷を理解することができる。

なおダンテの詩的表現には、多くの比喩や象徴が用いられ、単語の意味を文字通りに解釈するだけでは十分に理解できない部分が多い。特に、『神曲』においては、地獄篇・煉獄篇・天国篇それぞれの構造の中で、同じ単語が異なる意味を持つ場合が多々ある。これは、寓意的な解釈が求められる文学作品ならではの特徴であり、学習者にとっては高度な読解力を必要とする。本稿では、具体的な詩行を引用しながら、字義的な解釈と寓意的な解釈を比較し、どのように読解すればより深く理解できるのかについて考察した。

今後の研究課題として、日本語話者向けの学習テキストにどのような補足が必要なのか、ま

た、具体的な指導法としてどのようなアプローチが有効かをさらに探究することが挙げられる。『神曲』は単なる古典文学ではなく、わが国でもイタリア語の奥深さや歴史的背景を学ぶための優れた教材となる可能性を持つ。『神曲』を学ぶことは、単なる語学習得にとどまらず、イタリア文化や歴史、さらには西洋思想全般への理解を深める契機となる。本稿が、その可能性をより具体的に示す一助となれば幸いである。

参考文献

- Anna Maria Chiavacci Leonardi (a cura di), *Dante Alighieri La Divina Commedia*, Mondadori, Milano, 2016.
- Aristide Marigo (a cura di), *Dante Alighieri De vulgari eloquentia*, Le Monnier, Firenze, 1938.
- Emilio Pasquini e Antonio Quaglio (a cura di), *Commedia*, Garzanti, Milano, 2009.
- Gianfranco Bondioni (a cura di), *Dante Alighieri La Divina Commedia*, Casa Editrice Principato, Milano, 2011.
- Giorgio Inglese (a cura di), *Convivio*, Biblioteca Universale Rizzoli, Milano, 1999.
- Giovanni Fallani, Silvo Zennaro (a cura di), *Dante Alighieri La Divina Commedia*, Newton Compton Editori, Roma, 2014.
- Luca Azzetta (a cura di), *Dante Alighieri Epistola a Cangrande*, Editrice Antenore, Roma, 2024.
- Mirko Tavoni (a cura di), *Dante Alighieri De vulgari eloquentia*, Mondadori, Milano, 2017.
- Natalio Sapegno (a cura di), *Dante Alighieri La Divina Commedia Paradiso Guida allo studio*, La Nuova Italia, 2011.
- Pietro Cataldi e Ennio Abate (a cura di), *La Divina Commedia Questioni Temi Ricerche*, Le Monnier, Milano, 2002.
- Tommaso di Salvo (a cura di), *Paradiso*, Zanichelli, Bologna, 2000.
- Umberto Bosco e Giovanni Reggio (a cura di), *Dante Alighieri La Divina Commedia*, Mondadori Education, 2002.
- ジュゼッペ パトータ (著)、岩倉 具忠 (監修)、Giuseppe Patota (原名)、橋本 勝雄 (翻訳)、『イタリア語の起源：歴史文法入門』、京都大学学術出版会、2007年。
- M. D. ノウルズ、『キリスト教史4』、上智大学中世思想研究所 翻訳／監修、平凡社、2007年。
- 藤谷道夫、朝日カルチャーセンター講義録『『神曲』天国篇各歌章解説』、2025年。

註

- ¹⁾ イタリア本国においても、『神曲』を教材とした外国語としてのイタリア語教育 (didattica dell'italiano L2) に関する実証的研究は、現段階において極めて限定的である。本稿の主題と直接的に交差するものではないものの、参考資料として一定の示唆を含む先行的实践を以下に紹介する。とりわけ注目に値

するのが、M. Brandiによる論考『L'utilizzo della lettura poetica con studenti sinofoni: una proposta didattica per il XXVI canto dell'Inferno (中国語を母語とする学習者を対象とした詩的朗読の活用——『神曲』地獄篇第26歌を用いた一提案)』(Italiano LinguaDue 9, 257-272, 2017)である。本稿は、『神曲』地獄篇第26歌第85-142行を教材とした授業デザインを通して、中級前後(CEFR B1レベル)に位置する中国人学習者を対象とした詩的テキストの音声的接近(lettura espressiva ad alta voce)の実践的可能性を考察したものである。同授業案においては、第一に、学習者に詩的言語の韻律的構造および音声表現の様式を身体的に体験させること、第二に、プロソディ(韻律)および間(ポーズ)といった音声的要素がイタリア語における意味生成に果たす機能的役割への理解を促進することが主眼とされている。授業内では、俳優ヴィットリオ・ガスマンによる詩篇朗読映像(DVD)が補助教材として用いられている。加えて、A. Digiacomoによる論文『Teaching Italian Language and Culture through Dante's Inferno』(European Journal of Foreign Language Teaching 6, 1-20, 2022)は、文学作品の教育的応用において、より体系的なカリキュラム設計を提案している点で参照に値する。同稿では、中上級から上級(CEFR B2+/C1+レベル)に相当する学習者層を対象に、『神曲』地獄篇を中核教材とした言語・文化統合型のディダクティック・ユニットが提示されており、帰納的アプローチ(approccio induttivo)の枠組みのもと、言語的熟達と文化的リテラシーの同時的深化が試みられている。使用教材は、地獄篇第1歌冒頭12行の語彙補完および現代語訳演習に加え、視覚文化資料として風刺的コミック『Mickey's Inferno(ミッキーの地獄篇)』、聴覚教材としてロベルト・ベニーニによる『Tutto Dante(ダンテのすべて)』朗読映像が選定されており、学習者に対する多感覚的・重層的な文化接近の方途が確保されている。また『神曲』の内容を平易に解説し、外国人学習者による理解を促進することを目的とした参考書としては、C. Kleinhenz編『Approaches to Teaching Dante's Divine Comedy』(Modern Language Association of America, 2020)およびM. Marino著『La Divina Commedia per stranieri: Inferno』(Edizioni Edilingua, 2020)が挙げられる。前者は高等教育における文学作品の教授法に関する実践的指針を収録しており、とりわけ外国人学習者を対象とした授業設計の多様なアプローチを提示している点に特徴がある。後者は、『神曲』地獄篇を教材として取り上げ、読解課題、練習問題などを通じて、非母語話者が作品内容を段階的に理解できるよう構成された教育用テキストである。

- 2) 「種と共に」作り出すとは、動植物のように種(精子も含む)を通じて作り出すことであり、「種なしに」作り出すとは、鉱物などの無機物や〈自然発生するもの antomata〉を指す。
- 3) 藤谷道夫、朝日カルチャーセンター講義資料『神曲天国篇解説第17歌資料』を参照。
- 4) 図は藤谷道夫、朝日カルチャーセンター講義資料『神曲天国篇解説第1歌資料』P.1より引用。
- 5) e (l)i pii spiriti : 「そして(煉獄の)敬虔な霊たちが e le pie anime del purgatorio」
- 6) 「おまえがこよなく愛するものすべてを／おまえは失うことになる。これが／放の弓がおまえに放つ最初の矢だ。」(天国篇第17歌55-57)。ダンテは追放刑となって、財産をすべて没収されて無一文になり、家族と友人、祖国のすべてを失う運命にある。ダンテはこれを「運命の矢」と呼んでいる。第2の矢は、他人の家を転々と放浪しながら居候する辛い追放生活である。「おまえは味わうことになる、他人のパンが／いかに塩辛く、他人の階段の昇降が／いかに辛い歩みとなるかを。」(天国篇第17歌58-59)
- 7) 「カッチャグイーダの話はラテン語で閉じられる。ラテン語「decernere」を使うことで託宣風の調子が醸し出されている。この動詞は詩行に荘重さを与え、28-30行目ですでに触れられた主題～ダンテの神秘的な選出～を中心に戻している。この主題が火星天の3つの歌章全体の中心的な主題となる。」(Bondioni 2009: 274)